

矢内原伊作の本

4

人生の手帖



みすず書房

矢内原伊作の本

4

人生の手帖

みすず書房

矢内原伊作の本 4
人生の手帖

1987 年 5 月 20 日 印刷
1987 年 6 月 5 日 発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目 17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京 0-195132
本文印刷所 三陽社
扉・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1987 Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-00774-6
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

目次

I 人生の手帖

孤独について	2
平和について	10
愛する者の死について	17
幸福について	25
再び幸福について	33
自己について	41
友情について	48
家庭について	56
恋愛について	64
予言の論理	72
抵抗	97
軍隊	117

II 回想

虫は友だち 138

私の学生時代 142

戦争中の日記から 152

戦後の日記から 1 158

堀辰雄さんへの手紙 177

戦後の日記から 2 188

マチネ・ポエティックの友人たち 198

父と母のこと 204

リョウブの花 213

III 追憶

加藤道夫追悼 218

田邊元先生と私 223

三谷隆正先生のこと 229

深瀬基寛先生追悼 234

矢内原忠雄の『通信』と『嘉信』 237

目 次

ニコヨン画家中尾一枝さん	246
「染太郎」のおばさん	253
藤井孝四郎君のこと	259
齋藤磯雄と『同時代』	263

I

人生の手帖

孤独について

今月から、私はあなたに、かなり長い手紙を毎月書こうと思う。というのも万事がスピーディに運ばれ、手軽に、安直に解決されてしまういまの世の中では、手紙というものの重要さが見失われているように思われるからだ。どんな論文でも小説でも、本当は人と人との文通であり、魂から魂への呼びかけであるはずなのに、書く方でも読む方でもただ一通りの知識を交換したり、一時の娯楽に時を過したりして、満足していることがあまりに多い。小説を読んで楽しむのはよい。だが、表面的な刺戟を安直に受け取るだけで、本当に楽しいといえるかどうか。知識を学ぶことはよい。しかし、どこそこに何が書いてあったというようなことを憶えるのが、本当の知識といえるだろうか。本当の教養といえるだろうか。私たちは

何を読む場合でも、「頭」ではなく「心」で読まなければいけないのだ。私たちの心が動かされ、耕され、それによって私たちが本当に成長することができるのは、私たちが相手の人の心に触れ、その魂のなかにはいつて行く場合だけである。

だから、読書の最良の方法は、書物を手紙として読むということ、直接自分に宛てて書き送られた手紙として読むということである。手紙として読むことができないのは、書かれたものに魂がないか、読む方に魂がないか、どちらかだろう。その両方であることが近頃は随分多いように思われる。魂のこもっていないものを読むことは、結局こちらの魂を安く売り渡し、自分にとって一番大切なものを殺してしまうことになるだろう。こうした魂の自殺行為は、なかなか気附かれないけれども、それだけに、こういう自殺が重なってどんな人間ができあがるかを思うと怖ろしい気がする。いや、いまの世の中は、右を向いても左を向いても、魂の抜け殻で一杯になっているのだ。

読書の場合だけではない。同じようなことが音楽や美術のような芸術の場合にもいえるし、さらに、私たちの日常生活についてもあてはまるだろう。私たちの人生という布は、いうまでもなく、さまざまな人と人との関係によって織られているが、このかけがえのない大切な織物も近頃はますますお粗末に、安手なものになってゆくようだ。子供の時、私たちは二

つ三つの友情を大事にしている。けれども次第に大人になり、交際が広くなり、生活が複雑にそして忙しくなってくると、人との関係はそれぞれの独自の奥行を失って、通り一遍の附き合いに色褪せてしまう。習慣や利害が簡単に人を結びつけたり引き離したりする。「生れつき筆不精で」とか「とても忙しくて」とかいって、事務的な手紙しか書かなくなる。こういうこともやはり一種の魂の自殺行為ではあるまいか。

人生というものが私たちにとって一回限りの大切な織物であるならば、私たちはそれを織る糸を美しく丈夫なものにしなければならぬだろう。正しい人間関係が回復され維持され、それによって人生が美しく織られるためには、私たちは、何よりもまず、孤独でなければならぬ。孤独を大切にし、そして孤独に耐えなければならぬ。なぜなら、人は誰でも本来孤独なものだから。そして孤独な者だけが強固な人間関係を築くことができるのだから。

子供は大人の間にあって孤独である。子供はそのことを意識せず、その無意識の上に子供同志の強い友情を築いている。けれども意識がめざめるに従って、人は自分の孤独を感じる。世の中が信頼できないものであることを、家族も友人も自分を理解してくれないことを感じる。人生の入口で、人は誰でも自分の孤独を感じるのだ。大人から見れば、それは浅薄な観念病であったり、軽薄な感傷であったり、神経衰弱であったりする。「そんな時期があるも

のさ」と大人はいう。そんなことはない。おそらく人生は、その時、その本当の姿を見せているのだ。けれども青春は急ぎ足で過ぎてゆく。大人たちが招く。

そして孤独を感じている当の青年たちが、孤独を大切にする代りに、それを忘れようとし、孤独を、他のものによってみたそうとするのだ。寂しさを忘れるために友人を求める、恋人を求める、芸術を求める、享樂を求める。だが、そのようにして得られたものは、あるいは寂しさを忘れさせてはくれるかもしれないが、けっして孤独をみたしはしないだろう。なぜなら、他のものによってみたされるものは孤独ではないからである。

大切なことは、一度自分のなかにめざめた孤独を、他のものでまぎらしたりごまかしたりすることなく、逆に深め強めてゆくことである。孤独を他のものによってみたそうとするのは、自分を安売りすることであり、魂に自殺を行わせることだ。

むろん、孤独は苦しいもの、辛いもの、堪えがたいものに違いない。しかしそれを自分のなかに担い、それに堪えることによってのみ、私たちの人生は実りあるものとなるのだ。友情でも恋愛でも家庭でも、そこに生きた人間関係が築かれるためには、何よりもまず一人一人が孤独でなければならぬ。孤独であるということは、単に寂しがり屋であったり人付き合いが悪かったりすることではない。むやみに寂しさを嘆いたり人から離れていたりするの

は、孤独に堪えられずにそれから逃れようとしていることのあらわれである場合が多いのだ。感傷が孤独からの逃避である場合が多いのはこのゆえだ。人を避けることが孤独なのではない。真の孤独はむしろ一人一人の人と着実な交わりを築いてゆく力である。

人間は物体ではない。物体ならば「＋」「－」だけでも、一人の人と一人の人の結合は単に2ではなく3にも4にもなるのである。そして一人一人の孤独が深いものであればあるほどその結合によって築かれる結果は大きい。

たとえば恋愛にしても、多くの人はこれを、自分を相手に与えること、あるいは、相手が所有することと思っているが、自分が自分として確固に築かれていないならば、そのような自分を相手に与えたところで何になるだろう。花束は、泥を洗い、枯葉を落とし、美しく整えた上で相手に贈らなければいけない。恋愛が男女の合一であるといっても、美しい合一が築かれるためには、まず男女がそれぞれ美しい孤独の所有者でなければならぬだろう。恋愛がもっとも美しい人間関係であるのは、そこではお互いの孤独がもっとも深いところまでひろげられるからである。

ところが多くの若い人たちは、孤独を深めあう代りに、孤独からの逃げ場所を恋愛に求め、わずかばかりの表面的な快楽のために互いに身を投げかけあい、一番大切なものを簡単に毀

してしまふ。そこにあるのは単に「＋－＝」という機械的な関係だけで、恋愛という人間的な関係はないのだ。感情を清め、意志を鍛え、人間性を一番豊かにする場所であるはずの恋愛が、このようにして、安価な娯楽になってしまう。その結果残るのは、幻滅か、そうでなければ魂を失った形だけの人生である。このようにして多くの若い人たちは、孤独のなかに自己を集中することを知らず、孤独に堪える忍耐をもたないばかりに、美しく織られるべき人生の織物を、自分の手で台無しにしてしまふのだ。恋愛が孤独からの逃げ場所であつてはならない。むしろそれは人が一層孤独になる場所であり、そして、人が孤独であればあるほど、そこに築かれる関係はそれだけ一層持続的な、強固な、厚みのある、美しいものとなるだろう。だから、恋愛が苦しいものであり、精一杯の力で担い堪えて行かなければならないものであることは当然なのだ。そして、恋愛だけではない。親子でも、兄弟でも、友人でも、夫婦でも、すべての人間関係は、孤独の上に始めて正しく築かれるのである。

私たちが自分の孤独を粗末にし、これらの人間関係のなかに孤独からの逃げ場所を見出そうとしている間は、さまざまな失望や幻滅が後を絶たず、人生の布はぼろぼろになるばかりだろう。

もうすぐ冬になる。ある人は春を好み、ある人は秋を好み、またある人は夏を好むという。

それぞれの季節はそれぞれの良さを持っているに違いないが、私はなかでも冬が好きだ。

木々が裸の姿をあらわし、雪がこの世を清め、寒さが人を孤独にする冬。私たちは家のかに閉じこもり、自分自身のなかに閉じこもり、そして親しい人に手紙を書くだろう。

冬は孤独の季節、内省の期間、孤独な者たちが一つの火の周囲に集まり、そして人間と人間との関係が私たちの心をほのぼのと暖める時だ。だから、救い主の降誕を祝うクリスマスや、私たちの心を新たにする新年が冬にあるということはよいことに違いない。表面的なお祭り行事としてではなく、あなたのなかの孤独を確実なものに深め新たにすることをこの二つを祝うがよい。実りある豊かな人生がそこからひらけるだろう。

あるいはまた、世の中のお祭りが虚しいものに見え、そのなかであなたの孤独が一層大きくなり、あなた自身が寒空に慄えている裸木のように思われるならば、それこそ心から祝ってよいことではないだろうか。なぜなら、それは懸命に孤独に堪えている姿であり、やがて春の光のなかに生き生きとした芽をふく準備をしている姿なのだから。

寒空に立っている裸木のように、人間はみんな孤独なのだ。みんなが孤独であるこの人生は冬のようだ。炭も電力も乏しく、殺伐な空気が漲っているいまの世の中は、木枯のように私たちの身を切り、私たちの孤独をほとんど堪えがたいものにする。けれども、きびしい人

生の冬に堪えるものだけが崩れることのない人間関係を築き、豊かな人生を織りなすことができるに違いない。

孤独な者だけが愛を知っている。そしてその愛のあたたかさはどんなに厳しい冬も冒すことができないし、のみならず、寒さがきびしければきびしいほど、ますますあたたかさを増すだろう。冬がなければ春はないし、本当をいえば、冬のなかにだけ春はあるのだ。

よいクリスマスと新年をお迎えなさい。

平和について

私はあなたに幸福について語りたいと思う。青春の喜びについて、人生の希望について、恋愛について、教養について、あるいはまた学問や芸術について語りたいと思う。これらは皆大切な問題に違いない。そしてこれらについて一緒に考えることはどんなにか楽しいことだろう。けれどもこれらの問題よりもっと大切な問題が私の前に、またおそらくあなたの前に立ちふさがっているのだ。それは自由のびのびと話すことのできる問題ではない。噂話のように、あるいは机の上だけのことのように気楽に楽しめる話題ではない。苦痛をもつて堪え忍ばなければならない困難な問題なのだ。しかも、その一つの問題を考慮に入れないならば、他の一切の言葉は空言に過ぎないだろう。その一つの問題を回避するならば、幸福

も青春も希望も恋愛も教養も学問芸術もけっしてあり得ないだろう。困難な問題だけが私たちを本当に成長させることができる。そしてこの困難な問題に私たちが正しく立ちむかうことができるならば、おそらく他のすべての問題に光が射してくるに違いない。その一つの問題というのは平和の問題である。

平和！ と私たちが口にする時、何という甘美な世界が眼の前にひらけることだろう。何というやさしい気持が私たちを包み、何という大きな喜びが私たちの胸に溢れることだろう。戦争は本当に厭なものだ。憎んでも憎んでも憎みたりない。誰もがそれを知っている。それなのにどうしてこの世から戦争がなくなるのだらうか。

今日私は電車のなかで白衣の傷痍軍人を見た。一切の希望を失ったようなどす黒い顔色で、片眼を眼帯で蔽い、手は痩せ、そして片脚は鉄の器具であった。それは戦争に対する無言の抗議であり、一切の慰めをきびしく拒んでいる姿であった。乗客は一樣に顔をそむけ、彼の方を見ないようしていたが、戦争に対する深い悲しみと憎しみとは皆の胸を一樣に貫いたに違いない。戦後五年半、戦争が残した惨禍は私たちの周囲にいまなお、正視に堪えないほどあまりに痛ましく満ち溢れている。

誰もが戦争は厭だと思っている。しかし単に戦争を厭だと思い、漠然と平和にあこがれる